慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 石堂清倫・竪山利忠編 『東京帝大新人会の記録』 |
| Sub Title | K. Ishido and T. Tateyama, ed., Records of the shinjinkai |
| Author | 中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)<br>酒井, 正文(Sakai, Masafumi) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1976 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.10 (1976. 10) ,p.98- 103 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19761015-0098 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 紹介と批評

## 石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』

一　学生社会運動の先駆的団体として周知の東京帝大新人会（以下、新人会と称す）は、大正七（一九一八）年十二月に創立され、昭和四（一九二九）年十一月まで存続した。新人会は大正デモクラシーの昂揚期に誕生し、三・一五事件、四・一六事件等によるコミュニズムへの取締りが、苛烈をきわめるなかで解散した。

新人会会員のうちかなりの人びとは、後年、社会運動家、学者、実業家、政治家、ジャーナリスト、作家、評論家等として、指導的役割をなした。新人会がその活動期において発揮した影響力とともに、新人会出身者が後年社会人として多方面に亙り輝やかしい足跡を残してきていることも深く考慮しなくてはならない。以上の二点から、大正中期以降の日本を研究対象とする者にとり、新人会の存在は無視できないものがあるが、現在までのところ、これが総合的に研究されたものとしては、Henry Dewitt Smith II, Japan's First Student Radicals (Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1972) があり、菊川忠雄『学生社会運動史』（中央公論社刊　昭和六年、海口書店刊　昭和二十二年）は、学生運動全般を対象とするなかで、新人会の運動をかなり網羅している。また新人会の部分的研究としては、佐々木敏二「新人会（前期）の活動と思想」（『キリスト教社会問題研究』十三号　昭和四十三年）、神田文人「学生の社会主義運動機関誌―『デモクラシイ』から『無産農民』まで―」（『思想』二六四号　昭和三十八年二月）、思想の科学研究会編『転向（上）』（平凡社刊　昭和三十四年）中の二論文があげられるのではないかと思う。もつとも、新人会関係者による回想、手記、随筆、座談会等は必ずしも少なくはないが、しかしそれらは、対象とする範囲に傾きがあり、内容の集約度の点では新人会の創立から約三年間の範囲に偏在している。新人会十一年間の歴史は、前期、中期、後期に区別して考察することが研究上便利であろうが、従来、資料収集において、中期及び後期は前期に比較して困難であつた。例えば、原資料に限つても、創立から大正十一（一九二二）年四月頃までの前期には、機関誌『デモクラシイ』、『先駆』、『同胞』、『ナロオド』がほぼ定期的に刊行されており、これら機関誌は今日復刻されている。これに対し、同十一年四月以降の新人会中期及後期の広報紙としては、僅かに会報、ビラの発行に留まり、今日までそれらの原資料は研究者の共有の財産となつていなかつた。『東京帝大新人会の記録』は、新人会前期の諸事情とともに、久しくベールに包まれていた同会中・後期の状況が当時の関係者により記述されており、この方面の研究者に多大なる便宜をあたえるものである。

二　昭和四十四（一九六九）年一月十八日、新人会の創立五十周年記念集会が、旧会員約九十名を集めて東大構内、学士会館において催された。「すぐ隣りの安田講堂は、この日早朝から機動隊に包囲されていた。前年から講堂を占領してきた学生を実力で排除するため攻撃をはじめていた。空にはヘリコプターが飛びかい、ポンプ車と催涙弾で講堂は文字どおり水と煙につつまれていた」（三頁）。学生運動のパイオニアであった帝大新人会の創立五十周年記念集会が、帝大・東大史上未曽有の混乱のなかで行われたのである。この偶然性、皮肉な巡り合わせについて、記念集会参加者のうち、かなりの者が第一部において言及している。

本書「第一部　新人会記念集会」は、上記集会での参集者の発言を収めている。記念集会という場における発言という制約上、断片性、不確実性、散漫なところは避けられないが、当時の雰囲気を伝えて余りある。大正十四（一九二五）年に卒業した伊藤好道の妻よし子は、亡き夫との出逢いを明かしつつ、「さきほど子供があるんじゃないかといわれたんですけれども、当時御承知のように、社会運動なんかやっていく者は、子供をもってはいけないというような考え方がございまして、大変、健全で子供がもてたんでございますけれども、ついに子供をもたないで生涯を通してしまいました」（五七頁）と述べている。中野重治は、新人会の合宿生活の仲間には一人も酒をのむ者がいないため窮屈な思いをしたことを語りつつ、「酒をのまない青年が非常に勉強して、清潔な生活を送りながら、共同生活を楽しくやっていく」（五九―六〇頁）ことが可能であることがわかり、味わった経験を貴しという。よし子、中野の言葉の中に、新人会会員がひたむきな清潔さを持しつつ、緊張にあけ暮れていた姿をうかがうことができる。

三　本書「第二部　新人会生活の思い出」は、十二名の旧新人会会員の回想から構成さる。新人会中期に当る大正十四年以前が対象とされた回想には、浅野晃「震災前後の思い出」（大正十二〈一九二三〉年一、二月頃入会）、志賀義雄「『最新の理論』で新しい活動を」（大正十一年三月入会）、畑野信蔵「二つのタイプ」（大正十二年頃入会）、小沢正元「行人会まで」（大正十一年十二月入会）、東利久「東大セッルメントの歴史」（大正十三〈一九二四〉年以前入会と推定）、西本喬「地方高校と新人会」（大正十三年三、四月入会）の六篇がある。以上の六篇において記述された内容は、以下略述する新人会を取り巻く学生社会運動の客観的状況を念頭におきながら通読するとき、それらの資料としての価値の高さが十分理解されるであろう。

大正十一年十一月のロシア飢饉救済運動を期とし、学生社会運動団体の連合会としての「学生連合会」（学連）が発足し、翌年一月には、新人会のイニシアチブにより高等学校連盟が結成された。創立当初の両団体は微力にして、その存在は公然と発表されず、学校当局の干渉も受けずに進んだ。その後、この運動は急速に展開し、就中、関東大震災直後の社会と人心の動揺が味方して、組織が拡大し、ほとんど全国の大学、高等学校、高等専門の諸学校を席捲した。大正十三年六月、学生連合会は名称を「学生社会科学連合会」と改め、

その全貌を現わした。その時には、すでに加盟校四十数校、会員一、五〇〇名以上を数え、その組織も著しく整備され、確固とした勢力を築きあげていた。要するに、この時期を以て、合法的学生社会運動の頂点と見ることができるのである（菊川忠雄「学生社会運動小史」『菊川忠雄――その思想と実践』所収　三四二―三五〇頁参照）。以上を背景に、さきの回想を注視するとき、広範多岐に亙る内容も、以下の点に対象を絞ることができよう。

第一に、学生社会運動を躍進させ、その過程をトータルに表現した「リベツ化運動」が挙げられる。リベツ化運動は関東大震災後菊川忠雄（大正十二年入会）とその周囲の人びとにより開始された。それは、新人会が「何も会そのものを自由主義化しようとしたものではなく、一般学生の自由主義的な活動や事業の中へも会員が積極的に入りこんで、その社会主義的影響を強めると共に、会員獲得の一便法としようというのが眼目」（畿野信蔵、一三一頁）であつた。これにより新人会会員の活動分野は、東京帝大セツルメント、学内消費組合、帝大新聞、学友会、弁論部等に拡大し、会員数も「有名な新人会の人数がこんなにも少ないのか」（志賀義雄、一二三頁）と新入会員を驚ろかせる程の状態から、急速に増大したのであつた。しかしながら、このリベツ化をめぐり、これを推進する菊川忠雄と、これに反対する志賀義雄の対立を描く畿野の回想は興味深いものがある。

第二に、東京帝大セツルメント運動（以下、東京帝大は省略する）への参加がある。関東大震災における東京帝大の救援事業を機に、末弘厳太郎の指導で、大正十二年十一月から十二月にかけて設立されたセツルメントは、当初その事業内容に、成人教育部、調査部、児童部、医療部、法律相談部、市民図書部を擁し、その後事業も変遷し、指導者に穂積重遠を加えたが、昭和十三（一九三八）年二月まで十四年間存続した。中期及後期の新人会会員にとり、セツルメント運動への参加は活動意欲を盛り立てるに格好であつた。セツルメントにおいて新人会が力を入れた事業は、大正十二年六月から開校された労働学校であつた。因に、本所柳島における帝大セツルメントの初めの頃のセツラー一〇〇名中、新人会会員は三〇名以上にのぼり、セツラー以外の会員の多くも、適宜事業に係わつたものと思われる（Smith, op. cit., p. 144参照）。第二部前半に限定すると、浅野晃、志賀義雄、小沢正元、東利久が、セツルメントに触れた回想、記述を残している。

第三は、新人会による各高等学校の社会科学研究団体の指導の面である。西本喬「地方高校と新人会」は、一例ではあるが新人会会員の培養皿としての高等学校の社会科学研究団体と新人会の影響力との関係を具体的に示している。三高生であつた西本は、大正十一年、新人会会員（黒田寿男、志賀義雄、友岡久雄）の講演に刺激をうけ三高社会問題研究会を創立したこと、新人会の援助をえて高等学校連盟を結成したこと等を挙げている。後年、新人会が作り上げた各高等学校とのパイプから、「大学に入るというよりも、新人会に加入するため」（島野武、一六二頁、及び野田弥三郎、一八五頁参照）大学の門をくぐつた高校生が出現している。

次いで、大正十五（一九二六）年から昭和三（一九二八）年の期間

に新人会に入会した六名の旧会員の回想に移ろう。この時代は、前述した学生社会運動の躍進期を過ぎ、急速にそれが尖鋭化した時期であつた。リベツ化運動は完全に清算され、新人会は明確に「無産階級の一翼」としての立場を持するに至つた。収録された回想は、島野武「桜木町・清水町・森川町」（大正十五年四月入会）、内野壮児「三・一五以後の一時期」（昭和三年三月入会）、林睦夫「三・一五ころの清水町」（昭和三年三月頃入会）、山内忠吉「豊島園事件」（昭和三年三、四月頃入会）、野田弥三郎「若かつた日の思い出」（昭和二〜一九二七〜年三月入会）、片山睿「思い出すままに」（大正十五年六月頃入会）である。これらの記録は、福本イズムの影響に関するもの及び三・一五事件に関するものである。もつてこの二件が当時の学生運動にあたえた衝撃の大きさがわかる。

福本イズムの衝撃について、野田弥三郎は「昭和二年の春というと、前年来の福本イズムの影響力の絶頂期である。だから、雑誌『マルクス主義』や『政治批判』、それに福本氏の個人雑誌『マルクス主義の旗のもとに』にのつた福本氏と福本イストといわれる人々の論文をめぐつて『理論闘争』が熱気をもつてやられていた」（一九〇頁）と野田が入会した当時の会の様子を伝えている。福本イズムに特有の用語をちりばめた先輩会員の演説には舌を巻くばかりであつたとも回想する。入学時期は異なるが、下記の西本喬の回想はさらに福本イズムの影響力を生き生きと描いている。「これは忽ち新人会員の間に燎原の火のように流行し、会員は争つて福本の著書を買い求め、それを聖書のようにあがめ、文章を暗記した。僕もそれを買い求めたが、文章が生硬難解であるばかりでなく、その意味を判読理解することは到底出来なかつた。けれども、尖鋭な会員の闘士は福本イズムは金科玉条のように、一般の会員に向つて説伏のような形で討議を持ちかけてくる。『いみじくも…資本主義の没落の…過程を過程しつつあるが、君はどう考えるか？』と言つた調子である。答えようにも意味が分らないから答えられない。質問者の本人も分らないと秘かに思うのだが、反駁しようものなら、それは日和見主義者であり、ブルジョアに相通ずるものとして攻撃する。そればかりか、福本イズムの言葉は一種独特な生硬な日本語になつていない新造語であるが、それは彼等の氷の如き『冷徹な批判』であり、それを口にすることは『鉄の意志』を現わすものとされた。同時にそれは福本イスト同志の相言葉であり、これを口にしないものは労働運動のリーダーの資格がないとされた。従つて、新しい会員もそれを訳のわからないまま鵜呑みにして、得々としていた」（一六〇頁）。新人会は、当時の他の左翼団体同様に福本イズムの集団催眠にかかつたのである。

三・一五事件の影響の大きさは、旧会員の回想の幾つかの表題に、そのまま「三・一五」を冠している点からだけでも伺える。この事件の余波は新人会にとり巨大であつた。四月十七日文部大臣指示に基いた大学評議会の決議により新人会は解散を命ぜられた。大学当局の命令にも拘らず新人会は存続する方針を堅持した（山内忠吉、一八〇頁）。新人会は学内の一段と困難になつた運動を持続するかたわら、三・一五事件により活動家を奪われた左翼組織を補充するため

に学外の運動にも多くの会員を送り出さねばならなかつた。無産者新聞、産業労働調査所、青年同盟、学連書記、労働学校（内野壮児、一七一頁）、関東金属大崎支部（島野武、一六八頁）等々へ配置された会員は、好むと好まざるとにかかわらず白刃の権力を日夜じかに感ずる日常の中へとびこんでいくのである。

旧会員がそれぞれ回想した共通項に新人会の合宿生活があることも落してはなるまい。新人会の合宿は、会の活動の拠点であつたが、「勉強部屋は真夜中でも誰かが読書にふけつていて電燈の消えることが殆んどなかつた」（野田弥三郎、一八七頁）と回顧するほど勤勉な一面をもつていた。既にふれた中野重治の発言をここで想起したい。学生思想問題に関心を寄せた河合栄治郎は、新人会会員らのいわゆるマルクス学生を「彼等は一般の講義をブルジョワーの御用講義と称して教室に出席しない。然しマルクス主義に関する限りに於て、丹念に克明に研究に没頭する」（『中央公論』昭和四年一月）と評したことがあつた。この例に留まらず、新人会会員の様々な生態は、合宿生活の回想を通して垣間見ることができるのである。

## 四

「第三部　後期新人会の史実」は、第一部、第二部以上に資料的価値は高い。第三部は、堅山利忠「革命的インテリゲンチャの時代」（大正十五年三、四月頃入会）と久保梓「解体前後の新人会」（昭和三年三、四月頃入会）の二篇からなり、大正十五年以降の半合法から非合法へと立場を変えていく新人会と、その解散前後の状況を記述の対象としている。そのかなりの分量と内容の中から特に注目したいことは、新人会の解散事情についてである。

従来、新人会の解散は十分に解明されてきていない。関係者の中でも解散の事情を知つていた者は極めて限定された範囲の人びとに過ぎなかつた。Henry Dewitt Smith II の研究においても解散の事情は、著者の注釈に見られるように、その資料の多くを治安当局側のものに負うている（Smith, op. cit., Chapter 7, 8 参照）。このように解散の事情が不明確であつたのは、㈠新人会側の資料が乏しいこと、㈡会員間の情報の疎通を欠いていたこと、㈢新人会と他の組織とが複雑に混線していた点にあるのではないかと思われる。

まず第一点であるが、新人会は、三・一五事件を境に厳しい取締りの対象となり、会員の検束、逮捕の回数も増し、被る打撃の拡大化につれ、新人会側の警戒態勢も強化されていつた。ここから機関紙の発行もなく、ビラの配布に神経を尖らせる結果になつた。資料の欠乏はここからきたものである。

第二点の情報不足は、つぎのような理由から、やむをえぬことであつた。この頃の新人会は、厳格な規律で装備された非合法の組織（久保、二九三頁）となり、会員同志の横のつながりは極度に限定され、会員が相互に活動の範囲を知ることはできなかつた。同じ合宿所に起居を共にした会員たちでも、互いに名乗りあつたり、経歴を話しあうことはまれであつた。互いに仕事の部署を知ろうとしなかつた（久保、二八三頁）という事情にあつた。

第三点の組織の混乱について要約しよう、この時期の会員の活動は、新人会だけの活動に従事するというのではなく、読書会、消費

組合その他様々な方面にも及び、他の組織との区別が不明瞭になつた。三・一五事件に続く豊島園事件後、再建を目指した新人会の会員数は二百名を下らなかつたが、このうち半数以上の人びとが、なんらかの形で他の組織に所属していたという（久保、二九九頁）。

以上の点に鑑みて、第三部の執筆者が、新人会幹事長、学連委員長等の地位にあり、当時の状況を全体的に把握しうる指導的立場にあつたことから、この部の記述は資料的に貴重なものである。

新人会は、昭和四年十一月解散したが、本書巻末の資料篇所載の解散声明書には、「単に口さきでのみ共産党と共産青年同盟とを支持するのではなく、行動をもつて支持せんことを誓う。すなわち、新なる決意のもとに今日以後新人会の名をプロレタリア運動の暦より葬る。そして日本共産青年同盟の赤旗を守り、その組織的思想的影響を学内に確立せんがために一切の助力を致すことを約束する」（四一〇頁）とある。要するに新人会は、共産青年同盟とその学内組織である学生グループの中に溶解したのである。この終着点を念頭におき、以下、第三部の記述中から、解散に至るまでの過程の断面を抽出していこう。

新人会に共産党からの働きかけがはじまつたのは、昭和二年秋頃からである。新人会の中心分子を集めた秘密の研究会が組織され、堅山利忠も厳密なグループに入れられた。党フラクションが学生内に組織されていた（堅山、二五二―三頁）。このように共産党の組織化の中に組み込まれていつた新人会は、その中心メンバーの多くが共産青年同盟、無産者新聞、学生社会科学連合会等の中枢部に吸収されていた。共産青年同盟の中央部にあつた堅山の場合、昭和三年十二月、モスクワから共産党再建のため帰国した佐野博より、共産青年同盟の組織として優秀な学生を学生グループに組織する指令をうけた（堅山、二六五頁）。久保梓は堅山から「日本共産青年同盟の任務に関するテーゼ」を受け（久保、三二一頁）、学内に共産青年同盟の学生グループを組織した。この学生グループの組織の完了を待つて、昭和四年十一月二十二日（国際共産主義青年同盟創立十周年記念日）に新人会は解散した。

第三部を熟読して感ずることがある。新人会がマルクス・レーニン主義の思想を金科玉条としていたにしても、会員が自らの意思でその思想を選択し、自らの意思により思想を実践行動に移していた時期は、「新人会」と称してもいいであろう。しかしながら、外部の別組織から勢力拡大の対象にされ、やがて新人会以外の所から、新人会へ運動の方針が絶対命令として下されるような時期に至つた時の新人会を「新人会」と称していいであろうかという疑問である。新人会末期の事情が、かなり鮮明にされた本書を読み、この時期の新人会に対する疑問を率直に記すものである。しかしながら、かかる疑問が生じたことも、ひとえに新しい証文を読むことができたからである。新なる問題を提起すればするほど、第三部の資料的価値の高さは、高められることはあつても、低められることはない。巻末資料篇中の新人会年表は労作であり、新人会会員名簿と共に、この方面の研究者に益すること甚大である。本書は第一級の貴重な記録である。（経済往来社　三〇〇〇円）

中村勝範・酒井正文